



2011年8月10日放送

漢方頻用処方解説 呉茱萸湯①

富山大学大学院医学薬学研究部和漢診療学講座

野上 達也

適 応

呉茱萸湯は「心下が膨満し、手足が冷える人の慢性の頭痛や頭痛に伴う嘔吐、噯逆、腹痛などに用いる」方剤です。エキス剤の保険適応病名や近年の報告から病名をあげると、習慣性偏頭痛、習慣性頭痛、嘔吐、脚気・衝心、噯逆、噯気、月経困難症、腹痛に用いる方剤となります。

非常に苦味が強く飲みにくい方剤ですが、有効な症例では「苦くない」「飲みやすい」と言われることもあります。しかし、処方する前に、味については一言説明しておいたほうがよい処方だと思っています。

出典・処方名の由来

呉茱萸湯の出典は『傷寒論』および『金匱要略』です。条文をあげるとまず『傷寒論』陽明病篇に、「穀を食して嘔せんと欲する者は、陽明に属するなり。呉茱萸湯之を主る。」とあります。これは食事をすると嘔吐しそうになるのは陽明病に属するものである、として、呉茱萸湯の嘔吐が、太陽病の乾嘔や少陽病の胸脇満して嘔する柴胡の証でもないことを示している条文と理解されます。

少陰病篇には、「少陰病、吐利し、手足逆冷し、煩躁死せんと欲する者は呉茱萸湯之を主る。」とあります。この条文では嘔吐だけではなく、下痢があり、手足の冷えがあり、身の

置き所がなく苦しみ、死ぬのではないかと思えるものに呉茱萸湯を用いるとしています。四逆湯の煩躁との鑑別が難しいのですが、四逆湯を用いるほど重篤ではない病態です。

同じく『傷寒論』の厥陰病篇には、「乾嘔して、涎沫を吐し、頭痛する者は呉茱萸湯之を主る。」とあり、始めて頭痛に言及されています。この条文は『金匱要略』にも挙げられており、吐きそうになるが食べ物は出てこず、唾液や胃液ばかりを吐き、頭痛する場合に呉茱萸湯を用いると解釈されます。今日、嘔吐を伴うような頭痛に用いるのはこの条文が根拠です。

さらに『金匱要略』の嘔吐噦（えつ）下利病篇には、「嘔して胸満する者は、茱萸湯之を主る。」との記載があり、胸満が挙げられています。胸満は腹候では心窩部に張りがある所見として捉えることができます。方剂名は君薬である呉茱萸に由来すると考えられます。

構成生薬の漢方的解説

呉茱萸湯は呉茱萸、人参、大棗、生姜の4つの生薬からなる方剂です。原典では呉茱萸一升、人参三両、大棗十二枚、生姜六両を用いるとしています。

現代では、処方集によって生薬量は幅があり、呉茱萸 2-5g、人参 1-3g、大棗 3-4g、生姜 0.5-3g となっています。

富山大学では呉茱萸 5g、人参 3g、大棗 3g、生姜 1g を用いています。

呉茱萸はミカン科ゴシュユの果実です。古来より古いものほど良品で、最低でも収穫から1年以上経たものを用いるべきとされています。『神農本草経』では中品に収載されており、「一名、藪（ぎ）味辛温。温中下気、止痛、咳逆、寒熱、除湿、血痺、風邪（ふうじゃ）を逐い、腠理を開くを主る。」とあります。腹部を温め、鎮痛、制吐作用があり、吃逆を止め、腹痛を除きます。

人参はウコギ科オタネニンジン根です。『神農本草経』では上品に収載されており、「味甘微寒。五臓を補し、精神を安じ、魂魄（こんぱく）を定め、驚悸を止め、邪気を除き、目を明らかにし、心を開き、智を益すを主る。久しく服すれば身を軽くし年を延べる。」とされています。『重校薬徴』には、「心下痞鞭支結を主治し、心胸停飲、嘔吐、不食、唾沫、心痛、腹痛、煩悸を兼治する。」と述べられています。強壯作用、精神安定作用、生理機能賦活作用、記憶能改善作用などがあります。

大棗はクロウメモドキ科ナツメの果実です。『神農本草経』では上品に収載されており、「味甘平。心腹の邪気を主る。中を安じ、脾を養い、十二経を助け、胃気平にし、九竅を通じ、少気、少津、身中の不足、大驚、四肢重きものを補し、百薬を和す。久しく服すれば身を軽くし、年を長ず。」と述べられています。他薬の効果を調和、緩和させる作用があり、脾胃を補う薬能を持つとされます。

生姜はショウガ科ショウガの根茎です。『神農本草経』の中品に「乾薑」の名で収載されており、「味辛温。胸満、咳逆上気、温中止血、出汗、逐風、湿痺、腸澼、下痢を主る。生者は尤も良い。久服すれば臭気を去り、神明に通ず。」とあります。『薬徴続編』には、「嘔

を主治する。故に、乾嘔、噫、噦逆を兼治する。」とあげられています。制吐作用、消化機能促進作用があり、また身体を温め発汗を促す作用があります。

われわれが今、日本で用いる生姜は生のショウガを乾燥させたものですが、制吐作用を前面に出したいときには八百屋などで売っているヒネショウガを一かけら入れて煎じていただくように患者さんにお話することもあります。

古医書における記載

吉益東洞は『方極』に、「胸満し、心下痞鞭し、嘔する者を治す。」としています。

尾台榕堂は『類聚方広義』で、「噦逆に此の方に宜しき者あり。按ずるに外台に曰く、食しおわって錯咽多噫（さくいんたあい）するを療すと。」として、しゃっくりやゲップに対して用いることを挙げています。

また、「霍乱にて吐せず下せず、心腹劇痛し死せんと欲する者は、先ず備急円、或いは紫円を用い、継いで此の方を投ずれば、則ち吐せざる者なし。吐すれば則ち下せざる者なし。のちに快吐を得れば、苦楚脱然と除かる。其の効や至速なり。知らざるべからず。」と急性胃腸炎による激しい腹痛にも関わらず嘔吐も下痢もないものに対して、制吐作用のある備急円や紫円を用いた後に用いて、非常に効果があるとしています。

稲葉文礼は『腹証奇覧』の中で、両側の胸脇と心下部、および胸に所見がある図を載せたうえで、「柴胡を用いて治せざるものに、ときどきこの証あり。いずれとなれば胸脇苦満して嘔してやまざるものなればなり。然れども胸脇苦満して嘔するものは柴胡を用いて癒ゆ。柴胡の証にして唯、胸満するもの、是れ、呉茱萸湯の証なり。其の胸満するに証あり（中略）胸脇苦満、心下痞鞭して嘔するを準拠とすべし。柴胡の証、大略かくの如し。しかれども痞鞭に至りては呉茱萸湯の証を大いなりとす。」として、柴胡剤を用いるような胸脇苦満と心下痞鞭があるものに呉茱萸湯を用いるとし、胸満があることと、心下痞鞭が著しいことを鑑別点としてあげています。

百々漢陰は『梧竹樓方函口訣』（ごちくろうほうかんくけつ）で、「頭痛、嘔吐の者に極めてよし。此の方のいく頭痛は頭心より項（うなじ）に連て痛し。また肋の痙癖（げんぺき）あり。腔間の厥陰経へつり込みて痛みあり。また、吐強く何を用いても納まらぬ者なり。此の方を温服すべし。太陽の頭痛を見違うべからず。厥陰、少陰の頭痛は何れも耳後よりくる者と知るべし。此は肝気厥逆の頭痛なり。」として、嘔吐を伴う頭痛に用いることを述べ、頭から首にかけて痛むものが特徴であるとしています。また、痙癖が胸部にあると述べ、胸部の痛みにも言及しています。

浅田宗伯は『勿誤藥室方函口訣』に、「此の方は濁飲を下降するを主とす。故に涎沫（ぜんまつ）を吐するを治し、頭痛を治し、「穀を食して嘔せんと欲す」を治し、煩躁吐逆を治す。」と述べ、「濁飲」すなわち胃内に停留する水毒を下降させることが薬効の中心であるとし、頭痛や食後の嘔気、煩躁、嘔吐を治すとしています。

また「肘后にては吐醋嘈雜（とさくそうざつ）を治し、後世にては噦逆（えつぎやく）

を治す。凡そ危篤の症、濁飲の上溢をつまびらかにして此の方を処するときは、其の効を挙げて数えがたし。」として、今日でいう胸やけやゲップ、しゃっくりに用いるとしています。

さらに「吳崑（ごこん）は烏頭を加えて疝に用ゆ。此の疝は陰囊より上を攻め、刺痛してさしこみ、嘔などもあり。いずれ上に迫るが目的なり。又、久腹痛、水穀を吐する者、此の方に沈香（じんこう）を加えて効あり。又、霍乱後、転筋に、木瓜を加えて大いに効あり。」と、烏頭を加えて嘔吐を伴う疝痛に用いること、沈香を加えて慢性の腹痛、嘔吐に用いること、木瓜を加えて嘔吐下痢の後の足の筋攣縮に用いることを述べています。